

19世紀アメリカンボードの宣教思想Ⅱ

1851-1880 (8)

塩野和夫

第3章 宣教師の思想と行動

2 グリーンの思想と行動

はじめに

アメリカンボードが19世紀中期（1851-1880）に宣教活動を始めた地域の1つに日本がある。1869年にペンシルバニア州ピッツバーグ市で開催された第60回年会¹⁾が日本最初の宣教師となるグリーン（Greene, Daniel Crosby, 1843-1913）に与えた任命書²⁾は当時の宣教方針であった「自治（Self-Governing）・自給（Self-supporting）・宣教主体（Self-Propagating）」の特色をよく示している。

- 1) グリーンに託された伝道の目的は、独立自給の教会の形成にある。
- 2) 日本での働きは、直接的な福音宣教であり、文書活動や教育活動ではない。

1) 第60回年会の報告は次の記事に記されている。

'Annual Meeting of the Board.' *Missionary Herald*. Nov. 1869. pp.353-386.

第60回年会における日本宣教に関する報告は次の記事に記されている。

'Proposed Occupation of Japan.' *Missionary Herald*. Nov. 1869. pp.380-384.

2) 第60回年会がグリーンに与えた任命書は茂義樹の翻訳を用いた。
茂義樹『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』23頁。

- 3 日本人の牧師を育成し、信徒による献金があれば教会を組織するように。
- 4 伝道地の決定はグリーンに任す。
- 5 日本に着任後は日本語の習得に務め、直接キリスト教伝道が可能になるまで、聖書または他の教科を教えて良い。
- 6 他教派の宣教師と親接な関係を保つ。
- 7 アメリカン・ボードに絶えず通信を送る。
- 8 会計としてアメリカン・ボードの資金運用を正確に行う。

19世紀中期におけるボード本部の宣教方針を前期³⁾と比較すると、地域教会の「自治・自給・宣教主体」に向けて厳格に規定されていたことが分かる。他方、宣教対象となる教会は地域社会が抱えた状況の中に立たされていた。だから、ボード本部の宣教方針に直ちに対応できるわけではなく、日本の社会はまさにそうであった。したがって、派遣された宣教師は本部の方針と教会、それと地域社会の状況の間であって、可能な道を探ることとなる。

グリーンの場合はどうであったのか⁴⁾。彼の思想と行動を19世紀中期を中心に探ってみたい。

3) 19世紀前期本部の宣教方針については以下を参照。

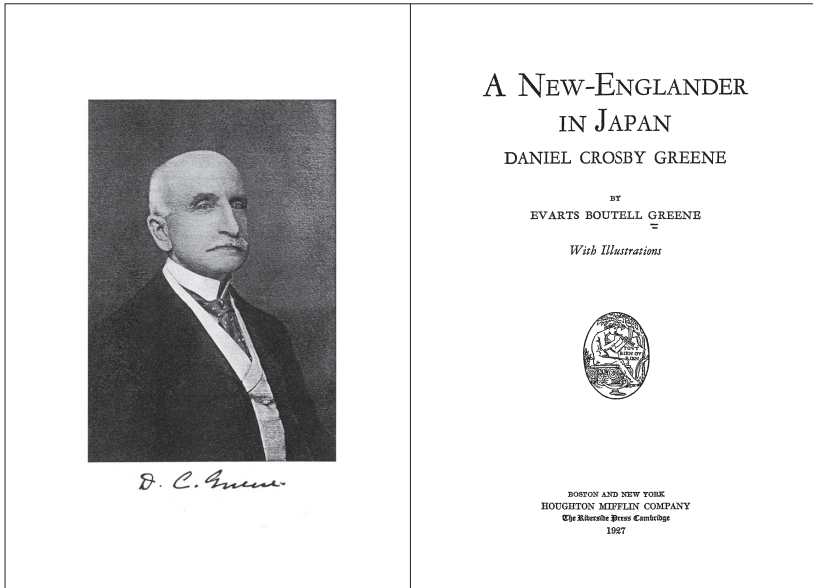
「アメリカンボード本部の宣教方針」塩野和夫『19世紀アメリカンボードの宣教思想 1 1810-1850』45-83頁。

4) グリーンに関して、次の文献がある。

E. B. Greene, *A New-Englander in Japan*. Daniel Crosby Greene. 1927.

「D・C・グリーン」『同志社百年史 通史編一』1979年、714-716頁。

茂義樹『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』1986年。



E. B. Greene, *A New-Englander in Japan*. Daniel Crosby Greene.

(1) 宣教師になる決意

ダニエルは1843年2月にボストン郊外のロックスベリー（Roxbury、現在のボストン・ハイランド）にアメリカンボードと関わりの深いグリーン家9番目の子どもとして誕生した⁵⁾。父デビッド（Greene, David, 1797-1866）は1832年以來ボードの幹事を務めていた。母メアリー（Greene, Mary Evarts, ?-1850）はボードが創設された1810年から31年まで主席幹事を務めたジェレマイア・エヴァーツの娘である。

1849年に健康を害したデビッドがアメリカンボードを辞任したため、一家は

5) ダニエルが誕生した当時のグリーン家については、以下に詳しい。

'A New England Family, 1780-1843.' E. B. Greene, *Ibid.*, pp.1-29.

「生い立ち」茂義樹、前掲書、3-6頁。

ウースター (Worcester) の西数キロにある小さな村ウエストボロ (Westboro) に移る。ところが翌年、メアリーが亡くなったために家族はしばらく離散した。再び家族そろって生活を始めたのは1852年秋で、バーモント州ウィンザー (Windsor) においてだった。ウィンザーで初等中学校 (Grammar School) と高等学校 (High School) を終えたダニエルは、1860年秋にバーモント州の西部にあるミドルベリー大学 (Middlebury College) に入学した。しかし、数か月学んだだけで1861年秋にはニューハンプシャー州ハノーバーにキャンパスを持つダートマス大学 (Dartmouth College) に転校している。在学中に経済的問題・北軍のダートマス騎兵隊への入隊 (62年6月-10月)・深刻な病 (a serious illness) を経験しながらも、64年夏に学士号 (bachelor's degree) を取得して卒業している⁶⁾。

1964年秋にウィスコンシン州パルミラ (Palmyra) にあるユニオン・スクール (Union School) に校長として任命され、働き始めた。年度の終わりには生徒からも地域社会からも信頼を勝ち得ている。小さな村にあった会衆派教会では日曜学校の校長 (Sunday School Superintendent) と教師を担当し、宗教的な責任感を強くしている。1865-66年度はミシガン州のウォーキーガン (Waukegan) にあった初等中等学校 (Grammar School) で校長を担当する。会衆派教会に所属し、地域社会の宗教活動にも熱心に参加した。グリーンは1865年夏頃までには牧師の道への志を強め、それから数か月の間に決意を固めている⁷⁾。

1866年9月にグリーンはシカゴ神学校 (Chicago Theological Seminary) に入学した。会衆派が1855年に設立した神学校で、同級生にデイヴィス (Davis, Jerome D. 1838-1910) がいる。シカゴでは会衆派の合同公園教会 (Union Park Church) に出席したが、深く関わったのはムーディ (Moody, D. L. 1837-1899)

6) ダニエルの大学生活については以下を参照。

'A New England Boyhood. 1843-1864.' E. B. Greene, *Ibid.*, pp.30-42.

「大学生生活」茂義樹、前掲書、6-8頁。

7) グリーンがアメリカで教育活動に従事した時期に関しては、以下を参照。

E. B. Greene, *Ibid.*, pp.43-52.

茂義樹、前掲書、9頁。

が指導した教育を受けていない人々に対する「都市における宣教活動」(City Mission Work)である。父デビッドの死に際しては数日間だけ急いで父の元へ赴いた。神学校が休みとなる5月には経済的事情で湖畔の学校(Lake Forest Academy)で臨時講師を務める。1867年9月にはマサチューセッツ州にあるアンドーバー神学校(Andover Theological School)へ移った。学問と敬虔の精神を重んじるニューイングランド神学の精神が息づく神学校でグリーンは父デビッドの関係者と関わりながら学ぶ。教員には聖書神学のミード教授(Mead, Charles M.)・セアー教授(Thayer, J. Henry), 教理学のパーク教授(Park, Edwards A.), 宣教学のアンダーソン(Anderson, Rufus), その他にヒンクス教授(Hincks)・ゴフ教授(Gough, John B.)・ダグラス教授(Douglass, Frederick)らがいた。46名の同級生が何よりも大切にしたのは互いの交流である。「神学クラブ」(The Theological Club)を初めとしたいくつかのクラブ活動も交流の場となる。グリーンが活動的な会員であった「研究会」(Society of Inquiry)は海外宣教活動に特別な関心を寄せていた⁸⁾。

アメリカンボードに提出した宣教師志願書によると、グリーンはシカゴ神学校在学中に海外で働く宣教師への志を得ている。アンドーバー神学校で宣教師の講演を聞き、1868年11月にアメリカンボードの集会に出席して志に対する確信が強められる。ただ一つ気がかりであった婚約者メアリー(Forbes, Mary Jane 1845-1910)の健康問題に関しても医療アドバイザーから「彼女はどの宣教地域においても健康に過ごすことができる」と助言を得た。そこで、グリーンとメアリーは1869年3月にアメリカンボードに申請書を提出した。ボードの諮問委員会(Prudential Committee)は4月6日にグリーンを宣教師として、メアリーを補助宣教師(Assistant Missionary)として任命した⁹⁾。

8) グリーンの神学校における生活に関しては、以下を参照。

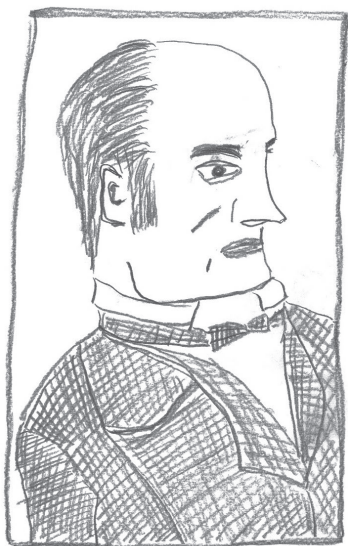
E. B. Greene, *Ibid.*, pp.52-71.

茂義樹, 前掲書, 10-16頁。

9) グリーンのアメリカンボードへの任命に関しては、以下を参照。

E. B. Greene, *Ibid.*, pp.74-77.

茂義樹, 前掲書, 16-19頁。



David Greene



Mary Evarts Greene

(2) 試行錯誤する日本宣教の端緒

アメリカンボードが当初グリーンに指定していた宣教地域は北中国ミッションである。ところが、1869年夏までに派遣先はグリーンの承認を得たうえで北中国ミッションから日本へと変更された。そのため、7月にアンドーバー神学校を卒業していたグリーンは急いで日本派遣に備えた。7月28日にはマサチューセッツ州ウエストボロ（Westborough）の会衆派教会で接手礼を受ける。29日には同教会で5年間に渡って交際を続けていたメアリー・フォーブスと結婚式を挙げた。アメリカンボードの第60回年会（1869年10月5日－8日、ピッツバーグ）で日本派遣宣教師として指名される。グリーン夫妻は11月4日に日本に向けてサンフランシスコ港を出港、1869(明治2)年11月30日に横浜港に到着した¹⁰⁾。

横浜から江戸に移ったグリーンは市川栄之助から日本語を学びながら、日本

宣教の場所を検討する。当時、5教派（アメリカ聖公会、アメリカ長老教会、アメリカ改革派教会、アメリカバプテスト伝道協会、イギリス聖公会伝道協会）が横浜・江戸・長崎・大阪で宣教活動に備えていた。当初、江戸を候補地として考えていたグリーンはプロジェクト（Blodgett, Henry）の進言を受けて、70年3月に伝道地として決定した神戸へ転居した。神戸でまず取り組んだ仕事は2つある。日本人への英語教授がその一つで、生徒には前田泰一・澤山馬ノ進（後の澤山保羅）・影山耕造がいて自宅で教えた。松山高吉が間もなく加わっている。江戸でグリーン日本語教師であった市川栄之助は妻まつとともに神戸に転居していた。71年6月に市川と妻まつが逮捕された。キリスト教入信の疑いである。グリーンは彼らの釈放のため奔走したが、72年11月に栄之助は獄中で死去した。まつは間もなく釈放される。もう一つは外国人のための礼拝着手である。仕事関係で神戸にはアメリカ人を初め、ドイツ人・イギリス人・オランダ人などの外国人がいた。キリスト教禁止の高札が立てられていても、居留地において彼らのために礼拝を行うことはできた。そこで、70年5月に外国人を対象としたプロテスタント方式の礼拝を始めた。72年11月には礼拝堂も完成して、ユニオン・チャーチ（Union Church of Christ）と名付けた。初代牧師にはグリーンが就任する。ただし、外国人への礼拝は日本人への宣教活動を目的とするアメリカンボードの理解を得ることはできなかった¹⁰⁾。

アメリカンボードの宣教方針とキリスト教禁教政策の間で可能な活動を求めて試行錯誤せざるをえなかった。そのような状況にあって英語学校開設という一つの可能性がもたらされる。きっかけはグリーンたちの下で英語を学んでいた青年の希望であった。グリーンとデイヴィス（Davis, Jerome D. 1838-1910）

10) グリーンが日本宣教へと派遣されたいきさつに関しては、以下を参照。

Strong, W. F., *The Story of the American Board*. pp.263-265.

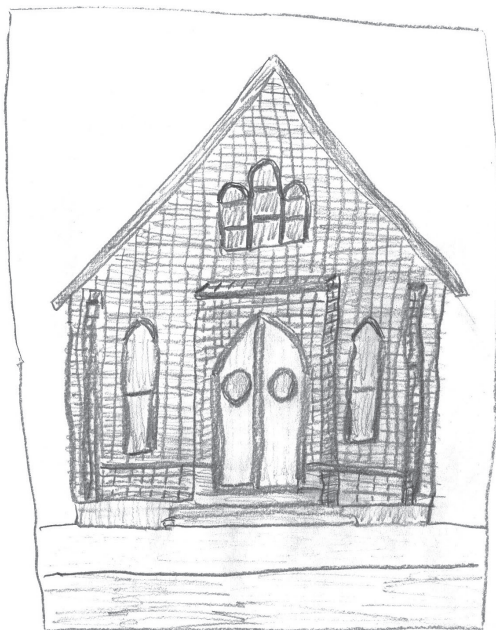
E. B. Greene, *Ibid.*, pp.78-82.

茂義樹, 前掲書, 21-24 頁。

11) 神戸における当初の宣教活動に関しては、以下を参照。

E. B. Greene, *Ibid.*, pp.101-113.

茂義樹, 前掲書, 34-92 頁。



ユニオン・チャーチ礼拝堂 (1872年竣工)

は1872(明治5)年12月、宇治野村(現在の神戸市中央区下山手通8丁目付近)に英語学校を開いた。開校して間もなくグリーンは学校の建物で日曜日にバイブルクラスを始めている¹²⁾。

ところが、わずか1年で1873年12月頃に英語学校は閉鎖された。同年2月に切支丹禁制の高札が撤去され、日本宣教への新たな可能性が開けたためである。英語学校の開校と閉校はキリスト教禁教下で試行錯誤したグリーンたちの活動の性格を象徴的に語っている。

12) 宇治野村における英語学校の開設に関しては、以下を参照。

E. B. Greene, *Ibid.*, pp.121-122.

茂義樹, 前掲書, 104-122 頁。

日本基督教団神戸教会編『近代日本と神戸教会』24-25 頁。

(3) 日本ミッションの一翼を担う

切支丹禁制の高札撤去はグリーンへの活動に変化をもたらした。しかし、この現象はグリーンに限ったことではない。アメリカンボード日本ミッションの活動においても重要な変化が認められる。要するにグリーンへの転機は日本ミッションの大きな流れの中に位置づけられるし、そうしてこそ適切に理解できる。そこで、1870年代における日本ミッションの組織と活動を概観しておきたい。

まず高札が撤去された1873年2月までの日本ミッションの組織と活動である。来日宣教師は次の10名である。グリーン・グリーン女史（1869年12月来日）、ギュリック（Gulick, Orramel Hinckley 1830-1923）・ギュリック女史（Gulick, Anna Eliza 1833-1938）（1871年3月来日）、デイヴィス（Davis, Jerome Dean 1838-1910）・デイヴィス女史（Davis, Sophia Demond 1843-1886）（1871年12月来日）、ベリー（Berry, John Cutting 1847-1936）・ベリー女史（Berry, Maria Elizabeth 1846-1932）（1872年5月来日）、ゴードン（Gordon, Marquis Lafayette 1843-1900）・ゴードン女史（Gordon, Agnes Helen 1852-1940）（1872年10月）。設立された日本ミッションのステーションは2か所で、神戸ステーション¹³⁾と大阪ステーション（1872年5月）である。日本ミッションの第1回年次総会は神戸で1872年1月に開かれている。このように見ると、禁教下にあっても組織として着実に整えていたことが分かる。活動としては次の3点に集約できる。①ユニオン・チャーチにおける外国人礼拝 ②英語の教授。当初は宣教師が個人で行っていたが、後に神戸宇治野村における英語学校（1872年12月設立）・大阪与力町における英語塾（1873年1月設立）が開校されている。③神戸・京都・大阪・彦根・長浜などへの訪問。活動としても組織と同様に準備的な段階であったことが分かる。

13) 神戸ステーションの設立時は不明であるが、1872年1月に開催された日本ミッション第1回年次総会までに設立されていたと考えられる。可能性としては、グリーンが神戸に着任した時点（1870年3月）・ギュリックが神戸に到着した時点（1871年3月）・日本ミッションの第1回年次総会が開催された時点（1872年1月）がある。

高札が撤去されて以降の変化はとりわけ活動内容に顕著である。組織と活動内容を概観しておきたい。高札撤去以降、1880年までに来日した宣教師は次の通り43名である。タルカット女史 (Talcott, Eliza 1836-1911), ダッドレー女史 (Dudley, Julia Elizabeth 1840-1906) (1873年3月来日), アッキンソン (Atkinson, John Laidlaw 1842-1908)・アッキンソン女史 (Atkinson, Carrie Electa 1848-1906), ドーン女史 (Doane, Clara Hale Strong 1841-1902) (1873年9月来日), デクスター (Dexter, Granville Mears 1839-?)・デクスター女史 (Dexter, Florence Allene 1848-?), グールディ女史 (Gouldy, Mary Elizabeth 1843-1925) (1873年10月来日), レヴィット (Leavitt, Horace Hall 1846-1920)・レヴィット女史 (Leavitt, Mary Augusta 1853-1914) (1873年11月来日), ティラー (Taylor, Wallace 1835-1923)・ティラー女史 (Taylor, Mary Felicia 1842-1925) (1874年1月来日), ギューリック女史 (Gulick, Julia Ann Eliza 1833-1936) (1874年6月来日), デフォレスト (Deforest, John Kinne Hyde 1844-1911)・デフォレスト女史 (Deforest, Sarah Elizabeth 1845-1915), アダムズ (Adams, Arthur Herman 1847-1879)・アダムズ女史 (Adams, Sarah Catherine 1849-1925) (1874年11月来日), 新島襄 (1843-1890, 1874年11月帰国), ドーン (Doane, Edward Topping 1820-1890), ラーネッド (Learned, Dwight Whitney 1848-1943)・ラーネッド女史 (Learned, Florence Helena 1857-1940), フィーラー女史 (Wheeler, Justina Emily ?-1878), スティーブンス女史 (Stevens, Frances Amelia 1848-1928) (1875年11月来日), バローズ女史 (Barrows, Martha Jane 1841-1925), スタークウェザー女史 (Starkweather, Alices Jennette 1849-?) (1876年3月来日), ジェンクス (Jencks, Dewitt Clinton 1841-1923)・ジェンクス女史 (Jencks, Sarah Maria 1856-1911) (1877年4月来日), パーミリー女史 (Parmelee, Harriet Frances 1852-1933), ウィルソン女史 (Wilson, Julia 1845-?) (1877年10月来日), カーティス (Curtis, William Willis 1845-1913)・カーティス女史 (Curtis, Delia Eliza 1856-1880), クラークソン女史 (Clarkson, Virginia Alzade 1851-1940) (1877年11月来日), ケリー (Cary Jr. Otis 1851-1932)・ケリー女史 (Cary, Ellen Maria 1856-1946) (1878年2月来日), ギューリック (Gulick, John Thomas

1832-1923) (1878年10月来日), デイヴィス (Davis, Robert Henry 1844-1899) ・ デイヴィス女史 (Davis, Frances Wadsworth 1852-?), ペティ (Pettee, James Horace 1851-1920) ・ ペティ女史 (Pettee, Isabella 1853-1937), ガードナー女史 (Gardner, Fannie Adelia 1849-1930) (1878年10月来日), コルビー女史 (Colby, Abby Maria 1847-1917) (1879年5月来日), デイヴィス女史 (Davis, Anna Young 1851-1944) (1879年10月来日), ケログ女史 (Kellogg, Emilie Louise 1856-1902) (1880年10月来日)。開設されたステーションは2か所で、京都 (1875年10月) と岡山 (1879年4月) である。日本ミッションの年会は正確には確認できない。活動としては3点に集約できる。①伝道活動として17教会の設立への協力がある。神戸公会 (1874年4月), 梅本町公会 (1874年5月), 三田公会 (1875年7月), 兵庫公会 (1876年8月), 多聞公会 (1876年10月), 西京第一公会 (1876年11月), 西京第二公会 (1876年12月), 西京第三公会 (1876年12月), 浪花公会 (1877年1月), 安中教会 (1878年3月), 明石教会 (1878年10月), 天満橋教会 (1879年1月), 彦根教会 (1879年6月), 八日市教会 (1879年6月), 今治教会 (1879年9月), 新肴町教会 (1879年12月), 岡山教会 (1880年10月)。伝道活動を推進するための日本基督伝道会社の設立 (1878年1月) にも協力している。②キリスト教学校設立への協力がある。女学校 (現在の神戸女学院, 1875年10月創立), 同志社英学校 (1875年11月創立), 同志社分校女紅場 (1877年4月創立), 梅花女学校 (1878年1月創立) ③出版事業への協力がある。グリーン, 新約聖書の翻訳作業に加わるために横浜へ移転する (1874年6月)。『七一雑報』 (1875年12月創刊), 日本ミッション『よろこびのおとずれ』 (1876年9月創刊)。グリーン, 旧約聖書の翻訳作業の委員に任命される (1877年6月)。『六合雑誌』 (1880年11月創刊)。組織としては来日宣教師, とりわけ28名を数える女性宣教師が際立っている。これは急速に進展した宣教活動と対応した結果だと考えられる。活動としては教会の設立とキリスト教学校設立への協力が目覚ましい。

アメリカンボード日本ミッションの活動がとりわけ教会とキリスト教学校設立への協力において急速に進んだ1873年2月以降, グリーンの存在と活動はど

のように位置づけられるのか。まず、1870年代におけるグリーン活動を概観しておきたい。グリーンは高札が撤去された1873年2月にキリスト教書を扱う書店を神戸元町通に開き、前田泰一を店員としている。次いで書店の一部を礼拝堂として整備し、9月から毎週日曜日に日本語による礼拝を始めた。12月になると安息日学校を始めている。日曜礼拝も安息日学校も参加者数に変化はあったものの、盛会であった。そして、74年4月19日の礼拝を迎える。この日の礼拝でグリーンから松山高吉・市川まつを初めとする11名¹⁴⁾が洗礼を受け、摂津第一公会（現在の日本基督教団神戸教会）が設立された。組合教会系では最初の教会である。グリーンは誕生した教会の初代仮牧師に就任している¹⁵⁾。このように高札が撤去されて以降摂津第一公会が設立されるまでに認められるグリーンの一連の行動は、明らかにアメリカンボードの宣教方針に即している。ここに日本ミッションにおけるグリーンの活動の一面がある。ところが、摂津第一公会設立からわずか2か月後の6月11日にグリーンは松山高吉を伴って横浜へ転居している。72年2月に開催された第1回宣教師会議において各ミッション共同で聖書の翻訳作業を進めること、そのために各派から1名ずつ委員を出すことを決議していた。その結果、組織された「横浜聖書翻訳委員会」の委員として改革派のブラウン（Brown, Samuel Robbins 1810-1880）、長老派のヘボン（Hepburn, James Curtis 1815-1911）と共にアメリカンボードのグリーンが選出されていた。そのために、グリーン到着を待って74年6月から委員会は翻訳作業に着手する。委員長がブラウン、ブラウン不在中の委員長がヘボン、書記兼会計がグリーンという体制であった。当初、翻訳作業は「一週四回、午後三時間ずつ行われた」が、76年には「毎週四回一度に五時間半ずつ」となっている。委員会は翻訳を終えた書から順次分冊として出版し、79年11月に

14) 1874年4月19日にグリーンから洗礼を受けた11名は、以下の通りである。

市川まつ・小野俊二・大田源造・大田とら・北村元広・小山りき・甲賀ふじ・佐治職・鈴木清・前田泰一・松山高吉。

15) 摂津第一公会創立に至る経過に関しては、以下を参照。

茂義樹、前掲書、113-135、161-203頁。

日本基督教団神戸教会編、前掲書、34-35頁。

すべての翻訳を終えた。80年4月には新約聖書翻訳完成祝賀会を開き、17分冊による新約聖書が刊行された¹⁶⁾。日本ミッションが教会と教育において急速に活動を拡大していた1870年代にグリーンは他教派との共同作業である新約聖書翻訳作業に打ち込んでいた。ここにグリーンのもう一つの特色を認めることができる。当時、日本ミッションの主要な関心は協力関係にある組合教会の活動に限定されていた。それに対してグリーンはアメリカンボードの枠を超えた超教派という特色を持った活動に従事していた。グリーンが日本で最初に取り組んだ仕事の一つ、ユニオン・チャーチの活動にも教派を越えた特色が認められる。松山高吉は1897（明治30）年に組合教会から聖公会に移っている。この時の松山の行動についてもグリーンの影響が指摘されている¹⁷⁾。



グリーン, D.C.

(4) その後のグリーン

「横浜聖書翻訳委員会」の責任を果たすと、グリーンは1881年に京都へ移っている。同志社で教えるためである。日本語によって教えることのできる宣教師は少なく、同志社にとってグリーンは貴重な存在であった。そこで直ちに同

16) 「横浜聖書翻訳委員会」による新約聖書の翻訳作業に関しては、以下を参照。

E. B. Greene, *Ibid.*, pp.139-159.

溝口靖夫『松山高吉』55-65頁。

大沼田実「日本における聖書研究史—新約聖書」『新聖書大辞典』附録13-23頁。

17) 溝口靖夫、前掲書、128頁。

志社の邦語神学科で神学・旧約聖書の積義・英文学を教えた。その間、グリーンは学生の声に耳を傾けて研究環境の整備を進め、経済的課題を抱えている者には配慮を示した。他方、頌栄館・同志社チャペル・有終館の建設に関しては設計監督者として責任を負っている。京都を離れた後も同志社に対しては理事として関わっている（1899-1911）¹⁸⁾。

1890年に東京へ移る。以後は主に関東地方におけるアメリカンボード宣教師団や組合教会の活動に協力している。社会的関心も強く、97年には片山潜の神田におけるキングスレー館建設を支援している。その間、日本アジア協会の会長や平和協会会長を務めて、日米の相互理解と関係改善に努めた¹⁹⁾。

1913年に神奈川県葉山で死去、グリーン夫妻の墓は東京青山霊園にある。

おわりに

宣教師グリーンがアメリカンボードの宣教方針を尊重した事実は疑いえない。日本宣教へと旅立つにあたって与えられた任命書にあった「伝道の目的は、独立自給の教会の形成」や「日本での働きは、直接的な福音宣教」といった指示は日本における活動に一貫しているからである。それにもかかわらず、アメリカンボードの宣教方針からは理解できないグリーンらの活動がある。ユニオン・チャーチにおける教派にとらわれない礼拝や超教派的な「横浜聖書翻訳委員会」への積極的な参加、あるいは関東に移ってからの社会的活動への協力である。これらもまたグリーンにおいては一貫している。この事実をどのように理解すればよいのか。

興味深い一つの事実が指摘されている。キリスト教禁教政策への違反を疑わ

18) 同志社における教育活動については、以下を参照。

E. B. Greene, *Ibid.*, pp.188-219.

『D・C・グリーン』『同志社百年史 通史編一』714-716頁。

19) 関東に移ってからの活動については、以下を参照。

E. B. Greene, *Ibid.*, pp.233-357.

『D・C・グリーン』『同志社百年史 通史編一』714-716頁。

れた市川栄之助が獄中死したのは1872(明治5)年11月である。それ以来、「四十余年にわたり遺された夫人まつ子の生活費は、彼女が世を終るまでグリーンの手から支給された」²⁰⁾という記録である。困窮した人に対して長期にわたる支援を伝えるこの事実はグリーンの間人像をよく語っている。すなわち、グリーンという人物は社会的弱者や経済的困窮者に対して助力を惜しまなかった。ここに彼を突き動かした根源的な動機がある。

このようにして明らかにされたグリーンの間人像から浮かび上がってくるいくつもの事実がある。シカゴ神学校在学中に深く関わったのが「ムーディが指導した教育を受けていない人々に対する宣教活動」だった事実、市川栄之助がキリスト教入信の疑いで逮捕された際に「彼らの釈放のために奔走した」事実、同志社で教えた際に「経済的課題を抱えている者には配慮を示した」事実である。こうしてみると社会的弱者に対する活動はグリーンの生涯において一貫していた。

ところで、グリーンを突き動かした動機には彼の社会的活動や超教派的活動との対応が2点認められる。1点は「神田におけるキングスレー館建設の支援」にしても、ユニオン・チャーチの活動にしても困難な課題を抱えていた点において対応している。もう1点は個別具体性と総体性との対応である。個別具体性を拡大すれば総体性となる。したがって、個別具体性において働いていた同じ動機がさらに広い場においても働きかける。この事例として顕著であるのは、「神田におけるキングスレー館建設の支援」である。同様に超教派的な活動においてもアジア協会や平和協会の活動においてもグリーンを突き動かした動機が働きかけていたに違いない。

このようにして、宣教師グリーンには根本的に2つの行動規範があった。すなわち、アメリカンボードの宣教方針とグリーンを突き動かした社会的弱者に対する根本的動機である。

20) 溝口靖夫, 前掲書, 22頁。